

令和7年度 第3回 立川市スポーツ推進審議会 会議録

(基本情報)

会議名称	令和7年度 第3回 立川市スポーツ推進審議会
開催日時	令和8年2月3日(火曜日) 午後7時00分～午後8時45分
開催場所	立川市泉市民体育館 研修室
次第	1 開会 (1) 辞令伝達 2 報告・協議 (1) 第3次スポーツ推進計画(令和8年度)の取組予定 (2) スポーツ団体への補助金交付について (3) 市内のプロスポーツ団体の活動状況について 3 その他
資料	・資料1 立川市第3次スポーツ推進計画の実施状況(令和8年度取組事業) ・資料2 令和8年度スポーツ団体への補助金交付リスト
出席者	[委員] 原田 尚幸、隈崎 由紀子、福原 憲生、山口 聡、永島 康雄、原 宏樹、 小川 祐太郎、吉井 英司、田尻 逸輝、山田 恵理 [事務局] 奥野 武司(文化スポーツ部長)、伊東 佐知子(スポーツ振興課長)、 上野 聖(企画調整係長)、秋元 公貴(スポーツ振興係長)、 瀧田 真希(スポーツ施設係長)、下條 愛里咲(企画調整係)
公開及び非公開	公開
傍聴者数	1人
担当	文化スポーツ部スポーツ振興課企画調整係 電話 042-523-2111(内線 4411)

1 開会

(1) 辞令伝達

2 報告・協議

(1) 第3次スポーツ推進計画（令和8年度）の取組予定

＜資料1に基づき事務局（スポーツ振興課長）から説明＞

- ・（会長）意見、質問などあるか？

（意見、質問なし）

- ・（会長）新しい施設予約システムの運用が1月5日から開始されたということだが、これはアプリか？

- ・（事務局）アプリではなく、ウェブサイトになる。そちらから各ご利用者様でログインし、使用していただく。現在はクレジットカード、コンビニ決済、ペイジーのみの支払いとなるが、3月から各種コード決済にも順次対応していく。

(2) スポーツ団体への補助金交付について

＜資料2に基づき事務局（スポーツ振興課長）から説明＞

- ・（会長）意見、質問などあるか？

（意見、質問なし）

- ・（会長）補助金交付は、年に1回このタイミングで新規もしくは継続での交付なのか。

- ・（スポーツ振興課長）継続になる。

- ・（会長）予算額も例年通りになるのか。

- ・（事務局）選手派遣補助金は、大会の距離に応じる形になるので、従前より若干増額している。

- ・（委員）前年度の予算額を資料に追加していただければと思う。

- ・（事務局）前年度追加の修正版を作成し後日送付する。

(3) 市内のプロスポーツ団体の活動状況について

＜事務局（スポーツ振興課長）から原委員の経歴紹介＞

＜（原委員）から（3）市内のプロスポーツ団体の活動状況についての説明＞

立川プロスポーツ連絡会という組織があり、そこを代表する形で参加させていただいているので、プロスポーツ連絡会の紹介をさせていただきたい。

立川プロスポーツ連絡会は、立川商工会議所内「まちづくり推進委員会」を母体とする連絡会で、立川市を拠点にしているなど、地域に縁のあるスポーツ団体によって構成されている。具体的な活動としては、月に1回競技団体が集まって情報共有や報告をして交流を深めるとともに、地域の清掃活動や、JR立川駅とコラボして「スポチャレ」と題し、スポーツの日にスポーツ体験会の実施などのイベントを継続して開催している。また、立川商工会議所と一緒に動いているので、立川第7中学校の体育館が火災で燃えてしまったときには、各スポーツ団体がクラウドファンディングを行い、燃えてしまったパイプ椅子等を寄贈した。

立川プロスポーツ連絡会には、8チームが所属している。1つ目は、アルバルク東京で、Bリーグ、B1に所属しているチームになる。Bリーグへなるときにアリーナ立川立飛をホームで使っていた時期があり、そこからご縁があるチームとなっている。現在、立川を拠点としていないが、ホームゲームを長くやっていたときにはB1で2連覇をされており、非常に強いチームである。アルバルク東京の現在の本拠地は、トヨタアリーナ東京となるが、年に1、2回ぐらいはアリーナ立川立飛で試合をしている。

2つ目は、石川ボクシングジム立川で、ボクシングは後楽園で試合をすることが多いが、地元で何かできないかということで、現在はアリーナ立川立飛でいくつか試合をやっている。過去には日本チャンピオンになった選手も所属しており、今も新人王を取った選手が所属している。ボ

クシングは非常に歴史があり、プロモーターの制度があり、独特の制度になっているが、将来的には立川で世界戦ができればと会長とお話している。

3つ目は、ジークスター東京というハンドボールのチームで、リーグHに所属している。最近、立川のプロスポーツ連絡会に入られた。経緯として、東京では3000人くらいのキャパシティでプロチームがイベントを開催する際の体育館がとても不足しており、代表的な体育館は使用希望の団体も多い。チームで活動場所を探していた時にアリーナ立川立飛を使いたいという要望があり、何回か利用していただいた。イベントのお客さんは、開催場所から半径何キロ以内に80%いるというデータがある。試合をする時には、その周辺住民にアプローチしていくことが非常に大事なので、いろいろな場所で試合を開催している。ジークスター東京が、立川プロスポーツ連絡会に入っていただき、立川と一緒に盛り上げたいということになった。すごく強いチームで、リーグ優勝に近いチームになっている。

4つ目は、立川アスレティックFCでフットサルFリーグのF1に所属している。元々は府中を本拠地としていて、府中アスレティックFCという名称であった。ただ、府中の郷土の森総合体育館の老朽化等や、Fリーグが定めているライセンスにサイズが足りないという課題があり、府中で活動できない状況になって、他を探されているときに、アリーナ立川立飛で試合をすることになった。当初は、府中で生まれて府中で長く活動してきた歴史のあるチームだったので、立川・府中アスレティックFCというダブルネームにしていたが、現在は立川に1本化して、活動している。ホームゲームは、アリーナ立川立飛だけではなく、泉体育館でも開催されていて、多くの小学校を訪問したり、地域の中でも精力的に活動されている。

5つ目は、たちかわ競輪選手会東京支部であり、選手会で入られている非常に珍しいケースである。元々立川には競輪場があり、当時、選手会へ入られている方にいろいろ話を聞く機会があり、競輪も変わっていかないといけないというお話があった。従前の公営ギャンブルのカテゴリーのひとつではなく、色々な皆さんに広く受け入れてもらう必要があり、そのためには地域の人と話しをしたり、触れ合う場所を作らないといけないという危機意識を持っておられたので、連絡会に入っていただくことになった。たちかわ競輪自体は立川市で開催されているが、先ほどお話ししたJR立川駅とのイベントと一緒にやっており、そのときに競輪を漕ぐ自転車の器具を持ってきて、速さ何km出るかを競い合うゲーム等をやっている。競輪に触れ合う機会もなかなかないので、このようなイベント等があるのはいいと思う。

6つ目は、立川ダイスで、元々は立川商工会議所がまちづくりのために始めた3人制のプロバスケットボールチームを源流としている。当時、商工会議所60周年のときに、今後10年間を見据えた計画を策定したが、地域を盛り上げるために何か地域スポーツをするのはどうかとなった。いろいろな選択肢があるなかで費用面を考えたときに、当時3人制のバスケットボールについては、それほど大きな費用がかからないということで始まった。たまたま同じタイミングでアリーナ立川立飛が建設され、その後商工会議所から、我々多摩スポーツクラブに運営母体に移り、3人制だけではなく5人制になった。ダイスとは、当時、名前を募集して決めたらしく、ルビコン川でのカエサルという言葉である「賽は投げられた」からきている。つまり商工会議所でスポーツチームを持つのは珍しく、後戻りをせず前に進んでいくという意味をこめてこの名前にしたとのことである。当時のチームカラーは、オレンジで中央線の色から取った。今のチームカラーは、青とオレンジの2つにした。ニューヨークカラーであり、物販の戦略等を考えて青色を追加した。メインは、アリーナ立川立飛を拠点に活動している。

7つ目は、東京ヴェルディである。ヴェルディとヴェルディのビーチサッカーの2チームが入っている。元々立川市が出資している関係もあり、本拠地のスタジアムは武蔵野の森になるが、多摩地域で活動されている。ヴェルディのビーチサッカーチームは、アリーナのすぐ近くのタチヒビーチを主な練習場にしていて、立川をメインに活動されている。オズ選手は、日本代表選手兼監督をやられていたこともあり、ワールドカップでMVPも取られている。

立川プロスポーツ連絡会には、多種多様なスポーツが参加しているので、月に1回集まり、地域の盛り上げこそ大事だよねという精神のもとに、色々な取り組みをしている。アリーナ立川立飛としても、いろいろなスポーツがあつていいよねという発想で、多種多様なスポーツにどんどん貸し出していきたいと考えている。

・(会長) 基本的には民間主導になるのか。行政との関係性はあるのか。

・(文化スポーツ部長) 立川プロスポーツ連絡会自体は、商工会議所が取りまとめて事務局機能を担っているが、我々もその会議には毎回スポーツ振興課の職員が参加して、情報共有を行って

いる。彼らに行っていたいでいる町の清掃活動等、いわゆる町の活性化を担うような活動や、たちかわ楽市等のいろいろなイベントに、チームの宣伝だけではなく、子供たちがスポーツに触れるきっかけをつくるという意味で参加いただいている。立川という町自体は、人口 20 万人に満たない町であるが、これだけ多種多様な競技のプロスポーツチームがホームタウンとしている町は、おそらく全国的にも稀有な状態だと思っている。その大きな要因のひとつに、地元企業の立飛が、この人口規模の町でも非常に使い勝手の良いアリーナを作ってくれたことがあげられる。そのことがここ 10 年ぐらいプロスポーツチームを大きく引っ張ってくれている要因となっている。立川市としては、プロスポーツチームがあることで、市内の小中学校に、チームの皆さんが学校訪問をして、他の町ではないぐらい子供たちと触れ合う機会を多く作っていただいている。今中学校において課題になっている部活動の地域連携・地域展開においても、貴重な地域資源のひとつとして、今後展開を広げていければと考えている。プロスポーツチームとしては、当然、経営が大事であり、選手の皆さんは、そのために試合をしている。チームの運営に関わっている指導者等いろんな方々にご協力いただき、部活動や子供たちがスポーツを楽しむきっかけを作り、今後ともご尽力いただきながら、プロスポーツチームがある町としてのイメージも含めて、魅力のひとつとして、定着していければと考えている。子供たちだけじゃなく、市民の健康づくりにおいても、日常生活の延長でアリーナへ行って、プロスポーツの試合を見ると、本当に心臓の鼓動が高まって、普段出さないような大きな声を出して応援する光景が、町の中にあるのは我々としても非常にありがたいことである。このことをスポーツ振興にも繋げていきたいと考えている。

・(委員) 多摩スポーツクラブといえば、立川市以外の市も含まれるイメージがあるが、多摩全体で事業を展開しているのか。例えば、立川市野球協会がコトブキヤスタジアムで立川市の子供たちを育てるという視点で指導等を行っているが、どこか民間のスポーツクラブと一緒に子供たちを育てることを展開していく構想があればと思った。もちろんプロスポーツが中心で、それだけでも精一杯というのは重々承知しているが、立川市のスポーツ協会と多摩スポーツクラブが協力して何か展開していくことができるのか。立川市以外の地域でも事業を行っているから難しいものなのか。

・(委員) スポーツクラブを作るときの会社名は、非常に意味を広く作っておくという考え方があり、「プロ」という名前も入れていない。多摩という多少広い意味でとった理由は、スポーツは多種多様であるので、例えば部活動での運動や、社会の中で子供たちがどのように運動していくかという課題があったときに、行政単位だけでなく、もう少し広い視野でいろいろなところと連携する可能性を含めて、広く媒介することができる。ただ、チームは立川ダイスなので、立川を本拠地にすることに変わりはない。将来的には、プロスポーツが色々と関わっていききたいという構想はあるので、スポーツクラブという名前にしたところはある。立川ダイスを頑張っているが、アリーナ立川立飛では色々な種類の教室等をやっている。子供のうちに何か専門的に取り組む必要はなく、いろいろなスポーツを体験して、そこから好きなスポーツを将来選べるような受け皿になりたい。どこまでできるかわからないが、地域の受け皿にはなりたいと思う。

・(委員) プロスポーツチームがこんなにあるのは、正直市民として知らなかった。立川ダイスは、保育園にチラシが置いてあるので、一度見に行かせていただいたが、すごく楽しかった。プロスポーツチームがあることを多くの立川市民は知らないのではないのか。立川の広報等でよくイベントがあるのを見ているが、アリーナ立川立飛の今月の試合情報を LINE 等で流していただければいいのでは。ママさんの友達内で週末子供を遊びに行かせる場所がなくなっているという話を最近よく聞いている。こういう試合があるよ、見られるよという情報があれば、たまには行ってみようということに繋がるのではないのか。それからバスケットボールに興味を持ち、やってみたいなと繋がったり、ショッピングモール等で落としたお金がプロスポーツに繋がればいいと思う。情報を得る機会や場所が少ないと思っている。今の時代に合った LINE 等のデジタル媒体で配信があればいいと思う。

・(会長) 市民に対するプロモーションは本当に大事であり、そもそも知ってもらうことから始まる。プロスポーツ側にとっても、このような活動を地元でやっていることを知ることで、さらに愛着が生まれるきっかけになる。一方、広報で民間企業のコマーシャルをするのかというと、難しい面もあるので、そこは見せ方をうまくやる必要があるのではないのか。産官学等の官民一体の

ような枠組みで一緒に協力して市民の皆さんのためにいろいろ取り組んでいるという見せ方を考える必要があるのではないか。

・(文化スポーツ部長) 今のご意見に対して、会長がおっしゃったように、今までは民間の取り組みを行政がプロモーションすることの難しさという見えないハードルのようなものがあつた。昨年の9月10日号から広報たちかわがリニューアルされて、1面カラーで写真が全面に出て、2面3面も1面と連動した紙面構成に変えた。その第2弾となる9月25日号には、開幕を直前に控えた立川ダイスの特集にしたが、初めての試みだったので、なぜ立川ダイスなのか、なぜバスケットボールなのかという否定的なご意見が広報に寄せられた。実はその後、9月10日号以降から先月末に発行された1月25日号まで12回発行されたうちの6回は、我々文化スポーツ部が所管している文化イベントだったり、スポーツ系の記事だったり、1月10日号には落語家を1面に載せたりと、立川で活躍している人や活動している人を町を挙げて応援していきましょう、そのような地域資源が私たちの町にはあるということ、我々自身も楽しみにして誇りにできるようなシティプロモーションをする見せ方に少しずつ変わりつつある。媒体としても、広報プロモーション課という部署で、立川の魅力をもっと多くの人に知ってもらいたい、市民にも知ってもらいたい、市外から来る人にも知ってもらいたいという想いでサイトを立ち上げると聞いている。またインスタグラムでも情報を発信していくと聞いている。スポーツは情報発信の中でも大きなコンテンツになると考えている。産業観光課という部署では、今週末の立川市で行われているイベント、例えば昭和記念公園の文化ゾーンでこんなイベントやりますという情報とあわせて、今週はアリーナ立川立飛でホームゲームがありますという情報を週末の金曜日に庁内の職員向けに発信している。そのような情報を広く市民向けに、LINEやインスタグラムで発信していく試みは、今まさに取り組もうとしているところである。

・(会長) 市民の皆さんに情報をお伝えする例として、自分が住んでいる地域では、市の広報紙に毎回地元チームの試合情報が掲載されていて、市民を無料で招待することがセットで掲載されている。その他に市長が地元のチームを市民の皆さんと一緒に盛り上げていきましょうという、民間ではあるが、地元チームをみんなで応援する雰囲気醸成している。そこまでできるようになれば、違和感なく広報もできる。単純に試合へ来てくださいだけではなく、市民の皆さんを無料で招待する機会をチームで用意してくれる雰囲気が定着すればいいなど。それから、これだけ地元でスポーツのコンテンツがあるのであれば、例えば立川市がスポーツで何かまちづくりを推進するような宣言をするのもひとつである。これも別の行政の例であるが、「スポーツ健康都市宣言」を宣言することで、スポーツを通してみんなで健康になりましょうというコンセンサスが得られやすい。プロスポーツチームの選手やスタッフ、コーチが小学校を巡回して、教えてくれるなど、入場料収入を増やすためにやるということではなく、市民の皆さんのために何ができるかということをお伝えすることがポイントになる。その結果として、地元でチームがあることによって、地元への愛着(シビックプライド)の度合いが高まることも既に研究で報告されている。スポーツを活用することで、市民の皆さんが立川市民であることに誇りを持つきっかけとなる。プロスポーツの側からすると、地元で地域貢献活動に取り組んでいることを市民の皆さんが知ると、そのチームに対する愛着の度合いが高まるという研究報告もある。うまく利用しながら、相互に関係性を構築し、それは全て市民の皆さんにとってもいいことであり、それができるのは立川だけですよねというのがうまく伝われば、さすが立川、立川といえば立川ダイスと名前が出てくる流れになればいいと思う。プロスポーツにはメディアバリューがあり、さまざまなメディア媒体を通じて拡散していく力を持っている。そのメディアを通じて市民の皆さんのためになる活動が紹介されるのも有効である。立川には、こんなにスポーツのコンテンツあるので活かさない手はないと思う。これをどこが中心となってやるのか、それが多摩スポーツクラブなのか、立川プロスポーツ連絡会なのか、ここに言えば全て通じるようなワンストップの仕組みがあるとより推進力になると考えている。

・(委員) 立川はこんなにスポーツをやっていたんだという感想をお持ちの方が多いのかなと思っていて、スポーツ団体からすればそれをどのように広報するか大きなテーマである。立川市とは協力してやっていこうという話はすごいしていただいている、このような場で概略的にプロスポーツが結構あることをお話しさせてもらえるのはありがたいと思う。東京は難しいとよく言われていて、バスケットボールだと岡山のチームは岡山ローカルのワイドショーでスポーツが取り上げられたりする。もう圧倒的に地域に特化したテレビ、地域に特化した新聞で取り上げてくれ

るから、東京で同じようにやるのは非常に難しい。キー局ではなかなか取り上げてもらえない。どうしても東京は全国レベルになるので、そこで食い込むのは結構難しい。市の広報で取り上げていただくこと等、まずはこれを続けていきたいと思っている。立川ダイスのホームゲームは、一試合平均 2200 人ぐらいで、年間 6 万人ぐらいのお客さんが来るので、ダイスのことだけでなく、スポーツをいろいろ出して、皆さんに知ってもらえるようお互いがこうやって見てもらえる場所を広げていくのいいかと思っている。スポーツチームとして、こつこつやってくのが一番大事だと思う。

・(会長) 立川の公式 YouTube はあるのか。

・(文化スポーツ部長) 立川市の公式 YouTube チャンネルはあるが、職員が手弁当でやっている状況である。それが果たしてどこまで見ていただけるコンテンツになりうるのかは、難しいところである。ただ今Instagram等のリール動画というショートで見ていただくほうが、場合によっては、より手軽に情報を伝えられる手段なのではないかと広報プロモーションでは考えているようである。素材としては、コツさえつかめば、見ていただきやすいし、90 秒の限られた時間の中でどれだけ魅力的でわかりやすく、詳しいことを知りたいときにはクリックさせてページへ飛ばすことを今考えている。ところで、先ほども話しがりましたが、立川ダイスは元々立川商工会議所が立ち上げたチームを源流にしているということ、また多くのプロスポーツチームの拠点になっているアリーナ立川立飛の会社を運営されているということもあって、今年度に入ってから 2 ヶ月に 1 回ぐらいは定期的な情報交換の場を持たせていただいている。その中では、単にバスケットボールチームを運営している立川ダイスとしてというよりは、立川におけるプロスポーツチームの可能性をどのように広げていくか等、立川ダイスというチームを持ち、アリーナの運営をしているという強みがあるので、そこは一つのモデルになる可能性があるので我々も多いに期待している。先ほどの部活動の地域連携・地域展開を考えていく上でも、バスケットボールという競技は、市内全ての中学校に部活があるとのことで、子供世代にも馴染みのある競技である。立川プロスポーツ連絡会は、横の繋がりを持っているが、それぞれの競技が場合によってはお客を取り合うような関係性でもあり、あそこのチームがこうやっているならうちのチームも負けてられないとか、切磋琢磨してお互いに競い合う形もあっていい。でも、地元で活動している仲間として、お互いが協力し合うところは協力し合うような良い関係性を保ちつつ、より市民の皆さんにスポーツを通じたまちづくり、町への愛着やこの町に住んで良かったと思えるようなまちづくりに繋がっていければいいと思う。

・(会長) ソーシャルメディアをなかなか行政でやるのは難しいかもしれないが、既にノウハウをお持ちのプロスポーツの皆さんの手を借りたり、情報発信できるような場でいろいろと試してみるとよいのではないかと。立川ダイスが中心となり、そのイベントに来たファンの皆さんもそれをきっかけに、立川にいろいろなスポーツがあることを知るような情報発信を大いに期待したい。立川という名前が入って、地元で根ざした活動をしているダイスには、ぜひ先頭に立ってやってもらうのが良いのではないかと。この審議会で議論している第 3 次スポーツ推進計画の数値目標についてどのように取り組むべきか、改めて地元のプロスポーツチームと連携して、前に進めていく意味で情報提供いただいた。その他についてはどうか。

・(委員) 多摩スポーツクラブの中に、立川プロスポーツ連絡会があるのか。それとも別の組織なのか。

・(委員) 多摩スポーツクラブは会社で、法人名になる。どちらかというところだとプロスポーツ連絡会の中で立川ダイスがあって、立川ダイスの運営法人として、株式会社多摩スポーツクラブがある。立川ダイスの運営会社であり、かつアリーナ立川立飛の運営会社もやっている。将来的にはバスケットボールだけでなく、他の種目もやりたいという思いもあってそのような会社名にした。

・(委員) 行政がいろいろなところで民間の応援をしたり、いろいろなところで民間の取り組みを宣伝するという連携は、良くなっているイメージがある。立川第 7 中学校の体育館で、いろいろやってくださったのは、一般的には立川ダイスがやってくれたというイメージが非常に強いと思う。

・(委員) 立川商工会議所内の「まちづくり推進委員会」が中心になってやった。我々チームとしては、返礼品を出した。

・(会長) ただそのことを市民の皆さんにわかりやすく伝えるよう見せ方を工夫する必要がある。これは何のためにやるのか、これは市と協力してやっているという見せ方がわかりやすい。その取り組みには、プロスポーツチームもあれば、スポーツ協会もあり、全てがスポーツ推進計画の実行に向けた活動であると説明できればよいが、まだそこまで至っていないと考える。これまでの議論を踏まえ、それぞれの団体がさまざまな活動をされているとのことなので、そのことを市の取り組みとして市民の皆さんへどのように見せていくのか大事なポイントと考える。

3 その他

(1) 委員からの情報提供について

＜委員より中学校部活動の地域移行に関するアンケート調査結果について資料提供＞

・(委員) 部活動の改革について、要は教員の働き方改革でもあるが、教員は本来授業をしっかり準備をしてやるのが仕事であるが、中学校では土日も含めて部活動の時間が多く取られてしまっているという現状に対して、文科省が、教員の働き方改革と同時にこの部活動の改革を進めているところ。なかなかこれも保護者の方には理解されていなくて、令和5年度から7年度が改革推進期間で、令和8年度からはもう改革実行期間となり、実行していかなければならない期間に入ってくる。ただ東京都は、まだまだ部活をやりたい先生もいるし、杉並区はもうほとんどの中学校で先生は部活を持っておらず、地域スポーツクラブが運営している。あとは過疎地域の方では大きな問題なので、クラブチームを立ち上げたりして、人を集めたり、人数が揃わなくて部活自体が成り立たないケースもみられる。神戸市は、教育委員会が主導となって先生たちにもう部活は持たせませんと言って、クラブチームを立ち上げている状況である。地域によって取り組みはそれぞれで、東京都もバラバラな動きとなっている。東京都も拠点校とって、例えば立川1中でサッカーの部活をやるから、2中と3中のサッカー部の生徒は1中へ行きなさいという流れも少しずつ出てきている。合同部活という形で進めていて、そのような流れになっていることを、保護者にも説明をしている。例えば、どここの中学校はこの部活がないから作ってくださいなど、そのような事例はまだまだ続いており、保護者へ理解を求めているところである。また、立川市教育委員会が5、6年生を対象にした部活動に関するアンケート調査がある。子供たちにはこのような声があるということを知ってもらい、皆さんで考える機会になればいいと思う。また同じように、5、6年生の保護者がどのように考えているのかについて、これも教育委員会がアンケートを取っている。実態を聞いたアンケートなので、内容を見ていただいて参考にしてもらえばいいと思う。保護者のアンケートを見ると、やはり部活動への期待は高いところがあって、なかなか学校の現場と開きがある。ただ、専門的な指導ができる学校の先生が良いと思っている保護者が9%しかなく、そんなものなのかなと思っている。外部の専門的な指導者がいいという保護者は34%で一番高くなっていた。また、お子様を中学校の部活動に加入させたいと思いますかという問いに対しては、91%が加入させたいと答えた。

・(会長) 5、6年生では、部活動以外で何かやっているとの答えが7割あった。小学校低学年・中学年くらいまでは、例えば近所のスイミングスクールだったり、体操教室やサッカースクール等に習い事として民間のスポーツ系教室に通いつつ、10歳を超えるあたりからそれがだんだん塾にシフトしていく傾向にある。調査結果から改めて学校以外でも何らかのクラブチームに入っている割合が高いと感じた。あと中学生になってやりたい種目の一位がeスポーツというのも興味深い。その他では、学校の先生があんまり期待されていない点については、先生の専門種目を必ずしも担当できないのであれば、専門知識を持った外部指導者に指導してもらった方がいいという考えが垣間見える。今後、部活動が地域で展開していく中で、子供たちがその活動の場を失い、やらなくなってしまうのは怖い。学校にやりたい部活動がないならいいやとか、そのようにならないことが大事である。

・(委員) 逆に学校の先生がクラブの指導をしたいときは、どうなるのですか。それはやっているのか。

・(委員) それは流れ的にはやって良い。兼業システムという仕事を兼ねるシステムがあり、立川市はまだ導入していないが、他の市ではそういう形にしている。兼業の届け出をして、認めら

れたらという形である。

・(委員) 全然やりたくないわけではなく、やりたいけれどできないという方もいるのか。

・(委員) 一番は自分が専門的に指導できないのに、部活を維持するために専門外の部活を担当するという現状がある(例:吹奏楽部の経験しかないが、卓球部を担当する等)。保護者からは、先生にもっと教えてほしいという要望があがることもある。あとは、やはり若い世代の先生たちは、土日を自分の時間として大切に考えている先生もいる。

・(会長) 部活動の件は、スポーツだけでなく、文化的な活動も含まれているのか。スポーツであれば、受け皿が地域スポーツクラブであったり、プロスポーツチームに協力いただくことがイメージしやすいが、文化系はどうなのか。

・(委員) 吹奏楽部の楽器は高く、寄付などをいただくケースもある。また、寄贈された楽器を各学校で割り当てることもある。立川には立川市吹奏楽団があり、その吹奏楽団の皆さんと一緒に練習する機会があり、ありがたいと思っている。文化系でも、例えば書道であれば、地域によって得意としている人たちに協力いただいて、うまくいきそうなイメージがある。ただ、吹奏楽部となると、楽器や会場も必要なので難しい。

・(委員) 単純にこれから子供の数がどんどん減っていくと思うが、一方で教える側の担い手も減っている。教える側も教えられる側も同じように減っているなら、教える側が足りなくなるという事象が発生しないのか。ただ部活の種目自体は減らないと思うので、一つの中学校でバスケットボール部が今まで20人ぐらいいたのが、今は4、5人ぐらいですとなったら、野球のように他の中学校と一緒に合同チームを作ることもあると思う。つまり中学校単位でなくて、もう少し広い意味で部活動をやっていくという構想は文科省的なところではないのか。

・(委員) 東京都教育委員会は独自の拠点方式を取り入れており、そこを拠点としてやりたい子はそこへ集まり、指導者がいるケースである。さっき申し上げたように、例えば立川1中にサッカー部をたてて、立川を4分割することがあげられる。ただそうすると、授業が終わってからそこへ移動するのに時間がかかり、活動時間が短くなる等、いろいろな問題があると思うが、そうしていかないと回らない。ただ、教員の働き方改革が主導になっていて、結局、部活動を切り離していこうという考え方が強いので、需要と供給のバランスにはあまり重きを置いてない。

・(委員) 例えば指導者になりたくて教員になられる方が一定数いる。拠点方式は、移動の関係があるからというお話もあるが、むしろちゃんとした指導者がいるところを拠点校にした方が良くはないか。場合によっては、市単位でなくてもいいのかなど。場合によっては、隣の市の方が近いのであれば、そちらでも良いのではないか。隣の市に、良い指導者がいたり、柔道場のような特別な施設があったり、単純に地域ではなくて、指導者や活動場所の特性によって、地域を使用するのもありではないか。

・(委員) 例えば立川第2中学校には柔道場があり、他の学校にはあまりない。そこに柔道をやりたい子は来ていいとアナウンスしたが、平日はなかなか来られないという現状がある。全国大会等、中体連も少しずつクラブチームでも出場しているですよと言っているが、いろいろな制限があるようでこういうクラブチームは駄目だというケースもある。そういうところが種目によって全然揃ってない。例えば水泳では、大会へ出場する際の参加費が1500円だとすると、立川市がその1500円を払ってくれる。しかしスポーツクラブで出場した場合は、自己負担となる。そうすると、保護者はお金を支援してもらえらるなら、学校の部活動を選ぶ。そうすると学校の先生が引率しなくてはならない。これはひとつの提案であるが、参加費にお金を充てるのではなく、指導者に充ててほしいと思う。そうすれば指導者をたくさん呼べるのではないか。そのようなことを踏まえて、いろいろと見直してほしいと思う。

・(委員) バスケットボールは、その点については比較的寛容で、立川ダイスのジュニアチームが全国2位になった。中学校で長年指導されていた先生たちからは反発があったかもしれないが、最近では中学校とクラブチームが同じ大会に出られるようになった。

<委員より錦町体育大会のミニテニス大会についての情報提供>

・(委員) ミニテニスは、立川市体育課の職員が発案し、全国に広がった。最初は40歳以上の競技として、ラリーはなるべく長く続くように競技を作ったらしいが、若い人がどんどん参加するようになって、今後は若い人が中心になるだろうと思っている。

<委員より立川スポーツ推進委員についての情報提供>

・(委員) 先日なわとびチャンピオンが行われ1年間の行事が終わった。あるけあるけは、20年以上前から始まったイベントなので、どのような経緯で始まったのかわからないが、緑色のあるけカードがあり、100キロごとに2800キロまでバッチと賞状の付与がある。賞状もA3サイズになって立派になった。最高で4700キロまで歩いている方もいる。あと石川ボクシングジムの選手が3年ぐらい前になわとびチャンピオンに来ていただいた。やはり選手は上手で早いので、小学生が見たらすごい経験になると思うが、コロナ明けということもあり、せっかく来ていただいたのに観客がとても少なかった。また、子供たちを対象に、ボクシングのミット打ちも受けてくださって、みんな参加して無料で相手をしてくださったのに、とにかく参加者が少なかった。そのようなこともあり、またお願いするのは失礼かなと思い、その後声掛けはさせてもらっていない。なわとびチャンピオンはコロナ明けからだんだん増えてきて、大人の参加も増えた。来年はもっと周知をすればさらに参加者は増えると思う。

・(文化スポーツ部長) 来年度の開催に向けては、もう一度石川ボクシングジムへ声掛けする等、子供たちに選手のかっこいい姿を見てもらえるよう時間を設けていただけないか、また改めてご相談させていただき、今度は良い形にできればと考えている。

<委員より市民栄誉表彰についての情報提供>

・(文化スポーツ部長) 中島ジョセフ選手は、出身が立川第1小学校であり、毎年12月1日に行っている市長賞よりグレードの高い市民栄誉表彰を授与した。これは文化やスポーツの分野でより顕著な活躍があった方に送られており、これまではジャズピアニストの山下洋輔さん1人にしか授与されていなかったが、今回は中島ジョセフさんと、デフリンピックに3大会連続で出場されて、昨年秋に開催されたデフリンピック東京大会では陸上競技の主将を務められた岡田海緒選手の2人に市民栄誉表彰を授与させていただいた。

・(会長) 皆様から他に追加でご意見やご質問はあるか。
(意見、質問なし)

・(会長) 以上をもちまして、第3回市川市スポーツ推進審議会を閉会とする。
閉会